

# John Urry 『The Tourist Gaze』の 観点からのウェルネスツーリズムの考察

Consideration of Wellness Tourism with the object  
of “The Tourist Gaze” by John Urry

森田浩司\*

MORITA Koji

In this paper it is considered ‘Wellness Tourism’ from the point of view of the concept ‘The Tourist Gaze’ that is a kind of the original text on Tourism theoretical study. Firstly, it is marshaled the concept of ‘The Tourist Gaze’ based on John Urry’s book ‘The Tourist Gaze’. Then it is considered the definition of ‘Wellness’ and ‘Wellness Tourism’. After that it is established a connection with Wellness Tourism and the concept of ‘The Tourist Gaze’. It is found out that it is difficult to apply the principle of ‘The Tourist Gaze’ to Wellness Tourism because the concept of ‘The Tourist Gaze’ is presupposed the concept ‘Mass tourism’ that people travel to have extraordinary experiences but Wellness Tourism is the travel to experience the ordinary Wellness lifestyle while traveling.

キーワード：観光のまなざし (The Tourist Gaze)、ウェルネス (Wellness)、ウェルネスツーリズム (Wellness Tourism)

## 1. はじめに

日本の温泉地を題材としたウェルネスツーリズム研究にあたり、海外の至近（2000年代以降）のウェルネス、ウェルネスツーリズムおよび一部のその派生概念についてサーベイ研究を行い、将来的な実証（事例）研究に向けて理論の分析を進めている。その研究過程を通じて、「ウェルネスツーリズム」の概念が、観光学理論研究の原典ともされる John Urry の『The Tourist Gaze（観光のまなざし）』の概念では捉えきれない部分があることが明らかになってきた。そこで本稿では、「ウェルネスツーリズム」理論の中で、既存の観光学の理論研究の代表的な「観光のまなざし」の概念（視点）では捉えきれない部分を明らかにすることにより、ニューツーリズムとしての「ウェルネスツーリズム」理論や日本の実情

に即したウェルネスツーリズム理論研究の多角的な着眼点提供の嚆矢としたい。

まずは John Urry の ‘The Tourist Gaze’ について、主にその概要をまとめている同書第1章の内容について整理していきながら、‘The Tourist Gaze’ の書かれた時代の観光に係るマスツーリズム全盛の時代背景からの観光の非日常性を考察する。次いで、ウェルネスツーリズムの「ウェルネス」という言葉の定義について考察し、その後、引き続いて「ウェルネスツーリズム」の定義について考察する。そうして、各々の概念を考察したのちに、The Tourist Gaze（観光のまなざし）の観点から「ウェルネス」および「ウェルネスツーリズム」について、その関係性を明らかにし、ニューツーリズムとしての「ウェルネスツーリズム」が、既存の観光学の理論研究の代表的な「観光のまなざし」の概念（視点）では捉えきれない部分について明らかにしていく。

\*大阪観光大学観光学部

## 2. John Urry の ‘The Tourist Gaze’ の概念

同書で John Urry は、休暇・観光・旅行により、短期間、日常生活から離れ、異なる景色、風景、街並みに対して、まなざしもしくは視線に関する議論をなすことを目的として考察を進めている。また、あわせて、多様な歴史上の異なった社会集団のなかで、どのようにして、観光のまなざしに変容し発展してきたのか、このまなざしが構成され増殖していったプロセスについて述べられている。

観光のまなざしは何か始めから存在している特質で定まるのではなく、社会の中にある非観光的社会行為との対比、とりわけ家庭と賃労働のなかに見られる慣行との対比から定まるとしている。また同書では、観光のまなざし（あるいはその研究）の発展と歴史的な変遷についても考察されている。ツーリストであるということは「近代的」な経験の特徴の1つである。19世紀以前には、上流階級以外の者が労働とか仕事と関係のない理由で、何かを観にどこかへ旅をするということはまずなかったとしている。従い、近代社会での大衆観光の大きな特徴は、あらゆる年齢層の大衆が基本的に労働と関係ない動機でどこかへ出かけ、何かにまなざしを向け、そこに滞在するという事である、とまとめられている。

さらに、観光行為に関する社会学的な理論研究の先行研究業績が列記されている。まずブーアスティンの「疑似事象説」を挙げ、大衆ツーリストは本物ではない作り物のアトラクションを嬉しがり、だまされていながらも「疑似事象」を楽しむ、としている。次に L ターナーとアッシュを挙げ、彼らはこの理論をふくらませ、観光客は観光のまなざしに決められたしかるべき対象以外は禁止される、としている。

次にこの考え方に批判的なコーエンの例を挙げ、多様なツーリストが多様な体験をし、こうした体験の「珍しさ」の多くを「疑似事象」の完全な装いで隠したままでいることは不可能と述べている、としている。

またブーアスティンの「疑似事象説」の見解に挑んだ例としてマッカネルの見解を取り上げている。マッカネルは、どのツーリストにも本物志向があり、他人の「リアルな生活」の中にツーリストは独自の魅惑を感じて自分の経験の中では味わえない現実性を持ち、ツーリストのまなざしの対象となるとしている。「疑似事象」は観光対象となる観光地側のツーリストのまなざしの侵入からの自己防衛という観光の社会的関係に由来するもので

あって「まがい物」を求める個人的な動機には由来しないというのである。

上述の先行研究例の分析から、Urry は「鍵となる点は、住居・労働の平常の場と、観光のまなざしの対象（の場）に違いがあるということである」と考えた。つまり「まなざしの対象は日常の体験と対比的なものであり、観光は日常と非日常との二項対立から生じ、観光体験は、通常では得られないような愉快的な体験を誘発するある種の様相あるいは要素を内包している」としている。

以上を端的に表すと「日常生活との対比に係る対象すなわち非日常体験への関心から生ずる観光客の視点が『観光のまなざし (The Tourist Gaze)』である」として定義づけを行っている。

## 3. 「ウェルネス」の定義について

これまで、主に海外の至近（2000年代以降）のウェルネス、ウェルネスツーリズムおよび一部のその派生概念についてサーベイ研究を行ってきたが、本章では、そのうちの「ウェルネス」についてその概念をまとめていく。

Sheldon & Bushel (2009) によると、‘wellness’ という言葉は 1959 年に Halbert Dunn が ‘wellbeing’ と ‘fitness’ を統合して作ったのがはじまりであるとされている。ウェルネスという言葉は 1970 年代に次第に取り上げられるようになり、至近の 10-15 年の間に多く使われるようになって (GWI (GLOBAL WELLNESS INSTITUTE)、2013)、ウェルネスに係る先行研究がみられるようになってきている。ただ、基本的にウェルネスの概念はライフスタイルに関わる概念であり、時代が変わりライフスタイルが変遷していく中で概念が拡大・変遷する可能性があり、時代に即した有用な研究とするためにも、至近の研究、とりわけ 2000 年代以降の至近の研究に焦点を当てて考察を進める。

ウェルネスという言葉は、かなり抽象的で大局的な意味合いを有する。ウェルネスは、医療、看護・保健から、高齢者介護、体育・運動学、自然・環境教育、自然レクリエーション、観光など、様々な領域から捉えることが可能であり、ウェルネス研究の切り口はかなり多様となる。この切り口全てを網羅するとなると、質・量ともに、対象文献・内容が膨大かつ散漫となり焦点が曖昧になることから、自身の研究の中心ディシプリンとなる観光学、とりわけウェルネスツーリズムに係る研究を中

心に考察を進めていく。

まず、サーベイしてきた様々な先行研究においても、基本的には、「ウェルネスとは『自発的、積極的』な病気予防や健康な状態の維持・促進を基準とした健康管理やライフスタイルへのアプローチである」という概念で考えられている。

またウェルネスとは健康に係る概念ではあるが、対症療法的な病気治療という身体的健康に特化した概念ではなく、「身体的な状態であると同時に心理的な状態であることが合理的に明らかになっている」(Erfurt-Cooper, P. & Cooper, M, 2009)。Smith と Kelly (2006) も「ウェルネスとは身体的な部分以上により精神的な(要素が強い)もの」と述べるように、心と身体の両方の健康に係る概念であると考えられる。実際に、ウェルネスツーリズム商品として提供されるものには、スパや温泉での寛ぎなど、身体とあわせて、心や精神的な健康・癒しを訴求しているものが多く見受けられる。

Erfurt-Cooper, P. & Cooper, M (2009) は、ウェルネスのコンセプトは様々な解釈がなされるが、ほとんどどれも自然と健康へのホリスティックな(総合的な)アプローチを原点としているとの見解を述べている。また National Wellness Institute (2014) や Muller&Kaufmann (2001) は、ウェルネスの概念を、身体的、精神的、およびスピリチュアルな健康、自己責任、社会的調和、環境的感受性、知的開発、感情的幸福感、職業的満足感といった領域を含む概念としている。

以上を含む複数の先行研究を踏まえて考えると、現時点では「ウェルネス」とは「身体的・精神的・Spiritual(生命や人知を超えた力)的、環境(自然・社会的)な複合的な視点を統合的(総合的)に取り扱い、健康の維持・増進に向けた様々な活動を通じて、自ら生活習慣を整え、健康で安心して満足できる状態に積極的に取り組んでいくことを示す概念」という定義が相応しいと考える。

#### 4. 「ウェルネスツーリズム」の定義について

現在社会の高齢化社会における健康寿命志向、ストレス社会下における癒し志向の背景で需要が高まっている「ウェルネスツーリズム」の定義について、海外の先行研究のサーベイを通じて検証を進めてきた中で、本章では、現在までの先行研究サーベイ時点での総合的な見地からの「ウェルネスツーリズム」の定義をまとめていく。

先行研究のウェルネスツーリズムの定義の共通する部分としてまず挙げられるのが「ウェルネスツーリズムとは、健康の維持・促進を求める旅行、そうした旅行に関連する物事や現象の総称であること、身体的な運動によるリフレッシュ・心理的なリラクセス・栄養価の高い食事など様々な観点から提供されるサービスを積極的に利用し健康の維持・増進に繋げていく旅行」であるということである。

同様におおよそ共通してみられる考え方として、ウェルネスツーリズムは、内包される旅行時の行動が極めて多様で広範なツーリズムであることが挙げられる。典型的な例を挙げると例えば Sheldon と Park (2009) は、供給側の提供する内容の観点からウェルネスツーリズムの例として、フィットネスやスポーツ、補完(的)な治療、文化/教養、生活習慣改善、自然体験、リラクゼーション、精神的な自分発見(の巡礼)、他人への奉仕、などと広い範囲に渡って例示している。また、このようにウェルネスツーリズムは、具体的なツーリズム行動の内容が広範囲に渡る概念であることから、旅行者の動機にも差があることが考えられる。GWI (2013) は、まずウェルネスツーリズムにおいて、完全にウェルネス目的の為だけに旅行をするツーリズムを「第一義的ウェルネスツーリズム」とし、旅行の目的の一部としてウェルネスに関する行動を取り入れるというツーリズムを「第二義的ウェルネスツーリズム」としている。

一方、先行研究において見解が大きく別れているのが「ウェルネスツーリズムの概念における主な目的や行為部分に、medical(医療・治療)要素を含めるかどうか」という点である。ただ、これまでの先行研究のサーベイに加え、これまでの温泉地などでの事例における現状を鑑みると、ウェルネスツーリズムの概念に医療(medical)要素は含めない方がより適切であると考えられる。その理由として、第一に、3章にて行ったウェルネスの定義(=自発的に健康の維持・増進に取り組むこと)から考えると「滞在地での行動が医師の管理下で行われる受身的な medical(医療・治療)要素」が主目的な場合、「自発的に健康の維持・促進に繋げることを最大の目的とするウェルネスツーリズムの目的・行動とはそぐわないと考えられるからである。第二の理由として、ウェルネスの観点からの温泉地をはじめとした地域活性化という視点で考えた場合、ウェルネスの定義(自発的に健康の維持・増進に取り組むこと)に基づく旅行者を対象としたツーリズムと、滞在地での行動が医師の管理下で行われる medical(医療・治療)目的の旅行者

を対象としたツーリズムでは、施策展開が大きく異なってくるため、同じ範疇とすることには無理があると考えられるからである。

以上を踏まえ、現時点におけるウェルネスツーリズムの定義としては「心、身体、魂、環境の複合的な観点から、健康で安心な状態を維持、増進することを主目的として、自発的に行われる旅行である」と考える。

また旅行動機の観点からのウェルネスツーリズムを、上述の **GW** (2013) が示していた内容を踏襲し、完全にウェルネス目的の為にだけ旅行をする「第一義的ウェルネスツーリズム」と旅行の目的の一部にウェルネスに関する行動を取り入れるという「第二義的ウェルネスツーリズム」に分類するのが相応しいと考える。

また、具体的な旅行中の行動内容が広範囲に渡る特質を有する点は既に述べたとおりであるが、施策展開の視点から考えた時に、行動内容の性質から広範囲に渡る旅行内容を同一範疇で一括りにするにはいささか無理があると考えている。従って、旅行目的の観点から、メインの目的が心身のリラクセスである「レスト (リラクセス) 型ウェルネスツーリズム」、メインの目的が身体を動かすことを通じて心身のリフレッシュとする「アクティブレスト (リフレッシュ) 型ウェルネスツーリズム」、健康の維持・増進を主目的に、旅行中に医療機関や施設・設備の利用を絡めた体験を行う「メディカルウェルネス型ウェルネスツーリズム」の3つに分類することが相応しいと考える。

## 5. The Tourist Gaze (観光のまなざし) の観点からの「ウェルネス」および「ウェルネスツーリズム」の考察

まず2章の再掲となるが、Urryによると「観光のまなざし (The Tourist Gaze)」とは、日常生活との対比に係る対象すなわち非日常体験への関心から生ずる観光客の視点である。本章では、この観点からウェルネスおよびウェルネスツーリズムについて考察する。

3章で述べたとおり、筆者は「ウェルネス」という概念は「身体的・精神的・Spiritual (生命、人知を超えた力) 的、環境 (自然・社会) 的といった複合的な視点を統合的 (総合的) に取り扱い、健康の維持・増進に向けた様々な活動を通じて、自ら、生活習慣を整え、健康で安心し満足できる状態に積極的に取り組んでいくことを示す概念」と定義している。

この「ウェルネス」の実践においては2つのパター

ンがある。1つは **daily life** つまり日常におけるウェルネス (ライフ) の実践である。毎日決まった時間にウォーキングに出かける、寝る前にヨガや瞑想を行う、日々の食卓になるべく有機野菜を取り入れる、早寝早起きなどの健康的な生活習慣を意識して実践する、などがその例である。一方、2つ目のパターンは日常生活を離れてのウェルネス (ライフ) の実践である。例えばストレス解消や健康増進を意識して、温泉地や自然豊かな環境を求めて出かける、スパやサロンに出かけてのリラクゼーション施術を受ける、などである。ただいずれのパターンにおいても根本的な概念「ウェルネス (ライフ) の実践」という部分は一貫して同じである。

以上のウェルネス (ライフ) の実践に係る考え方を踏まえて「ウェルネスツーリズム」について考える。「日常生活を離れて (=非日常体験)」という観点だけをピックアップして考えれば、「ウェルネスツーリズム」は「日常生活を離れてのウェルネス (ライフ) の実践」に当てはまることも考えられる。日常の喧騒を離れ休養を中心とした心身のリラクセスに重点を置く「レスト (リラクセス) 型ウェルネスツーリズム」もしく、日常生活とは異なる環境や運動で身体を動かすなど心身のリフレッシュに重点を置く「アクティブレスト (リフレッシュ) 型ウェルネスツーリズム」もしく、普段の自宅での日常生活では体験出来ない様な温泉医療に係る機関や施設・設備の利用を絡めた健康診断や温泉療法体験といった「メディカルウェルネス型ウェルネスツーリズム」もしくである。

ただ、「ウェルネスツーリズム」に関しては、別の観点からの考え方も可能である。第2章にて述べたとおり、Urryの先行研究の時代背景から考えて、Urryのいうところの直接的な「Tourist」または「Tourism」の対象は「近代的マスツーリズムあるいはその旅行者」であると考えられる。この「マスツーリズム」の観光行動の典型的なパターンは「物見遊山」型の周遊観光パターンである。つまり「観光のまなざし」の「観光」の指すところは「日常と非日常との二項対立から生じるような愉快的観光体験」である。しかしながら「マスツーリズム」に取って代わると称される「オルタナティブツーリズム」の代表例である「ヘルスツーリズム」の下位概念<sup>1)</sup>の「ウェルネスツーリズム」の場合、確かに、実践する場所や環境、内容は日常とは異なる (日常からは離れる) もの、**「ウェルネス (ライフ) の実践」という根本思想は日常・非日常問わず一貫して貫かれている。**すなわち、「ウェルネスツーリズム」は純粋な非日常体

験ではなく、日常実践している「ウェルネス(ライフ)の延長」の行動にすぎないのである。つまり、あくまで「ウェルネスツーリズム」は「日常」(の実践)の延長であり、「日常(のウェルネスライフ)との完全な二項対立から生じるような観光行動」ではないということである。従って John Urry「The Tourist Gaze(観光のまなざし)」第1章の中で示される「観光」の概念の観点から考えると、「ウェルネスツーリズム」は、Urryが対象としている「マスツーリズム」を念頭においた「観光のまなざし」の「観光」概念とは一線を画している観光概念・観光体験・行動であると考えられるのである。

## 6. おわりに

これまでの自身の観光学に関する研究を通じ、John Urryの‘The Tourist Gaze’は、観光社会学においては原典的な先行研究であると考えられる。観光の現象面に着眼点をおいた社会学研究において、当該研究は、以降の観光を題材とした社会学(観光社会学)研究の礎となり、多大なる貢献を果たしているものと推察される。

一方で、上述の5章でも触れたとおり、Urryの研究の時代背景から考えて、Urryの当該研究の主要な対象は「近代的マスツーリズムあるいはその旅行者」である。確かに現在もマスツーリズムが観光のmajorityの状態にあることは否めない。また観光研究においてはマスツーリズムに代わる研究対象として頻繁に取り上げられている「ニューツーリズム」も、観光データの代表的資料と考えられる日本観光振興協会の「観光の実態と志向」、(財)日本交通公社の「旅行年報」「旅行者動向」などの、旅行者の旅行目的に関する各種データでも示されているとおり、旅行市場全体あるいは旅行会社や観光産業の現場においては、まだまだこのニューツーリズムのシェアはそれほど高くない。しかしながら、高度経済成長期からバブル景気の前半にかけての日本の観光は団体旅行も多く、「マスツーリズム」が中心かつかなりのシェアを占めていたが、時代の変遷とともに、情報があふれるようになり人々の価値観も多様化するにつれて、ツーリズムの内容や種類も多様化していくようになって現在に至っていると考えられる。従って「マスツーリズム」一辺倒の概念や観点だけでは、現在の多様化している観光現象を包括的に捉えることは現実的に難しくなってきたことが窺える。

観光産業という「観光」を冠する産業が実在し、また「観光」が国策として国家や地域の活性化の1つの切り

口と考えられている現状下で「観光学」を考える場合、学術的な観点を、国家や地域、観光産業の質量双方の発展に資するところまで繋げていく研究であることが求められるものと考えられる。従ってUrryのようなマスツーリズムを念頭にした研究のみを深度化していく理論研究は、(そこに新たな知見が含まれていることが前提で観光社会学的には有意な研究となるかもしれないが)、マスツーリズム以外のツーリズムが実存している上述の観光学をとりまく現状を鑑みた場合、それだけでは必ずしも有意とは言いきれない状況になっており、より多様な視点からの深度化が今後の観光学研究の課題であると考えられる。

## 【補注】

- 1) 諸説見解が分かれるところではあるが、例えば Bennet, King と Milner (2004) は、ウェルネスツーリズムは健常者を対象とし、メディカルツーリズムは何らかの症状の治療を必要とする人々によるツーリズムで、ヘルスツーリズムはこれらの別々の領域を包括する(上位)概念としている。こうした見解が先行研究の間では主流となっている。

## 【引用・参考文献】

- ジョン・アーリ著；加太宏邦訳(2014)『観光のまなざし：現代社会におけるレジャーと旅行』法政大学出版局
- Bennet, M., B. King, & L. Milner (2004) The health Resort Sector in Australia: A Positioning Study. *Journal of Vacation Marketing* 10(2) (pp.122-137)
- Erfurt-Cooper, P. & Cooper, M (2009) *Health and Wellness Tourism\_Spas and Hot springs*. Bristol. Channel view publications
- GLOBAL WELLNESS INSTITUTE (GWI) (2013) *The Global Wellness Tourism Economy 2013 & 2014*. Miami. GLOBAL WELLNESS INSTITUTE
- John Urry (2002) *The Tourist Gaze*. (2nd.ed.) London. Sage Publications
- Mueller and kaufmann (2001) Wellness Tourism: Market analysis of a special health tourism segment and implications for the hotel industry. *Journal of Vacation Marketing*. 7(1) (pp.5-17)
- National Wellness Institute (2014) About Wellness. <http://www.nationalwellness.org/?page=AboutWellness> (19 September 2015)
- Sheldon Pauline, J. & Bushell, R (2009) 'Introduction to wellness and tourism'. In Bushell, R, Sheldon Pauline, J. (Eds.), *Wellness and Tourism\_Mind, body, spirit, place* (pp.3-18). Cognizant Communication Corporation
- Sheldon Pauline, J. & Park, S., (2009) 'Development of a

sustainable wellness destination'. In Bushell, R, Sheldon Pauline, J. (Eds.), *Wellness and Tourism\_Mind, body, spirit, place* (pp.99-113). Cognizant Communication Corporation  
Smith, Melanie & Kelly, C (2006) *Wellness Tourism.*

*Tourism Recreation Research.* 31: 1-4  
Smith, Melanie & Puczko, L (2014) *Health, Tourism and Hospitality\_Spas, wellness and medical travel* (2nd ed.). New York. Routledge